

自然教育園の動物目録の追録と 稀種動物の日撃記録 (7)

久居宣夫*

Notes on Newly or Rarely Observed
Animal Species in the Institute
for Nature Study (7)

Nobuo Hisai*

はじめに

今回は、1994年1月～1994年12月に新たに生息が確認されたり、目撃された種あるいは前報(久居, 1994)までに記録がもれた種について報告する。稀種については、「動植物目録」(国立科学博物館附属自然教育園, 1984)中で、r: “稀”, または (r): “古い記録はあるが、現在未確認の種”とされている全ての種を対象にしたが、これら以外にも最近特に個体数や目撃記録が著しく減少した一部の種も対象とした。

なお、学名および和名などは上記の目録に準拠した。また、カッコ内の日付は目撃あるいは捕獲した西暦年月日(日付のないものはふつうに見られることを示す)と目撃または捕獲地点と目撃者、捕獲者名を示し、氏名のない場合は著者の記録によるものを示す。

本報告をまとめるにあたって、種々のご教示と同定をいただいた東洋大学の大野正男教授、国立科学博物館動物研究部の友国雅章氏、日頃より貴重な記録を提供していただいている日本野鳥の会の守田洋氏をはじめ、情報を提供くださった方々に感謝の意を表する次第である。

1. 追 録

Arthropoda 節足動物門

Insecta 昆虫綱

Gampsocleis buergeri de Haan キリギリス(直翅目 キリギリス科)(1994.8.18 教育管理棟前)

本種は、教育管理棟前の草地を除草していたときに、筆者ら数人によって目黒通りに面した正門付近の植え込みで鳴き声を確認したものである。本種はこれまでに姿や鳴き声などが全く記録されておらず、また、鳴いていた地点が歩行者の往来が多い場所であったことから、恐らく、近隣の住人あるいは入園者によって放されたものと考えられる。

*国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Science Museum

Pyrrhalta tibialis Baly エノキハムシ（鞘翅目 ハムシ科）（1994.5.7 あずまや付近）大野正男氏
同定

本種は、1994.5.7に水生植物教材園ざわにある、あずまや付近に生育するエノキの稚樹（樹高約2m）
についていた幼虫1個体を吉野由美子氏が捕獲したのが最初である。翌日、筆者は同所より幼虫を10数
個体採集し、室内で飼育して1994.6.19以後数個体の羽化成虫を得た。

本種は黄褐色の7～8mmのハムシで、国内では本州・四国・九州に分布する（木元、1984）。大野
（1981）によれば、自然教育園内には“古い歴史時代には分布していたかもしれないが、少なくとも現
在は生息していないと考えられる”とされていた種であり、筆者のこれまでの観察でも園内の路傍では
生息が確認されなかったものである。

Chrysis shanghaiensis Smith イラガイツツバセイボウ（膜翅目 セイボウ科）（1994.6.8 正門付
近 大澤陽一郎氏）

本種は1993年の冬に、大澤氏が正門前のヒメグルミ付近で採集したイラガのまゆから得られたもので
ある。同氏によれば、採集したイラガのまゆの羽化が遅いので、まゆに孔をあけたところ本種の成虫が
でてきたとのことである。本園では、イラガのまゆ自体を観察する例が少ない。

本種は体長約10mm、全体が緑色の金属光沢の寄生蜂である。本種は中国中部が原産の帰化昆虫で、
日本では1914年九州の柳川で最初に記録されたという。その後西日本を中心に分布を広げ、現在は本州
の関東以西および四国・九州に分布し、特に、関西地方では本種によるイラガへの寄生が著しく、イラ
ガの発生が激減したという（奥谷、1977）。

ほかのセイボウ類は営巣性の狩蜂や花蜂の幼虫を寄主にするが、イラガイツツバセイボウのみは鱗翅
目のイラガに寄生する。また、特異な産卵習性を持ち、岩田（1982）によれば“堅いイラガの繭の頭端
部に、大顎で小孔を穿ち、産卵管を挿入して中の幼虫を刺し1卵を産付し、小孔を削りとった粉をこね
た練物で封じるのである。このような自らあけた産卵孔を再び封じる行動は、他のセイボウでは見られ
ないことである”という。

2. 稀 種 の 記 録

（1）昆 虫 類

Metochus abbreviatus Scott オオモンシロナガカメムシ（半翅目 ナガカメムシ科）（1994.9.3 イ
ンセクタリウム付近）

本種は1952年発行の「昆虫目録」（鶴田他、1952）に登載されているが、その後の目撃記録がなかつた
ので、ここに記録しておく。

本種は森林内の地表を活発に歩き回る大型のカメムシで、9～10月に新成虫が出現し、落下したヤツ
デなどの果実や地下茎を吸汁する（日浦、1977；安永他、1993）。

Acanthosoma denticauda Jakovlev セアカツノカメムシ（半翅目 ツノカメムシ科）（1994.7.19
食草園）

本種も1952年発行の「昆虫目録」（鶴田他、1952）に登載されているが、その後の目撃記録がなかつた
種である（久居、1994）が、食草園のカラスザンショウの葉上に止まっている雄を1個体捕獲した。

本種は、本園に多く生育するミズキのほかサンショウ・ヤマウルシ・ツタウルシ・ヤシャブシ・アセビ・スギ・ヒノキなどの果実に集まる（川沢・川村, 1977）。

Acanthosoma labiduroides Jakovlev
ハサミツノカメムシ（半翅目 ツノカメムシ科）（1994.9.3 建物跡地付近）

建物跡地付近の西側に生えている、スダジイの若木の葉上にいた雌雄それぞれ1個体を捕獲。本園では1991年に記録されて以来目撃されることが多くなった。

また、1994.7.15には園内のイモリの池付近で*Acanthosoma* 属の5齢幼虫2個体を捕獲したが、幼虫が判明している本種およびセアカツノカメムシとは異なり、現在のところその所属は不明とのことである（友国氏のご教示による）。

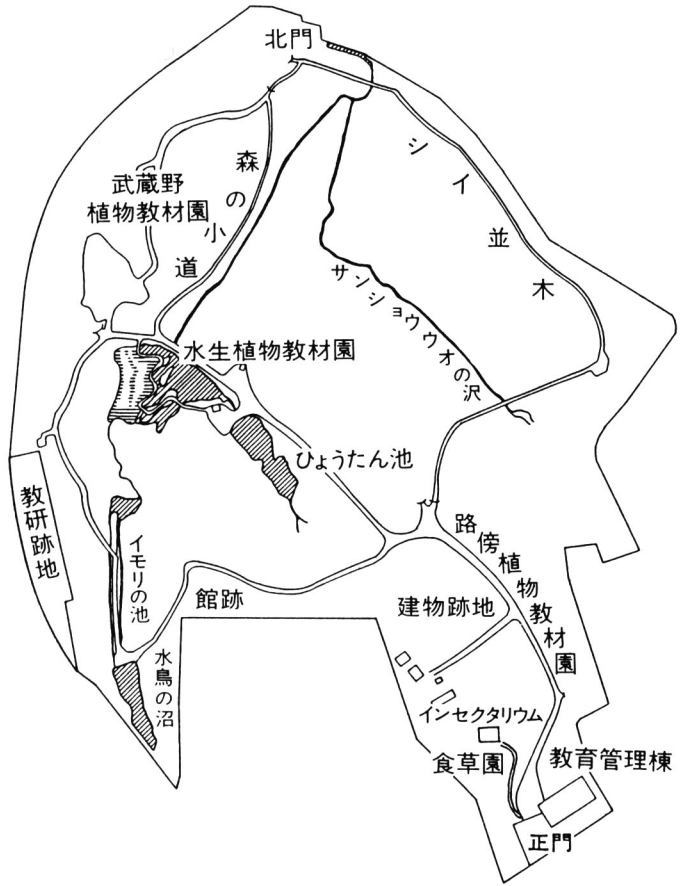


図1 自然教育園概略図

Papilio helenus Linnaeus モンキアゲハ（鱗翅目 アゲハチョウ科）（1994.7.20 食草園；同8.9 イモリの池付近）

モンキアゲハはほぼ毎年、夏季に園内へ飛来する個体を1～2回目撃する。1994.7.20の記録は、食草園に植栽されているアベリアへ吸蜜にきた雌である。この個体を捕獲し、インセクトリウム内に放逐したところ、カラスザンショウに20～30卵産付した。これらの卵のうち、一部を採取して容器内でカラスザンショウの葉で飼育したが、5齢幼虫までに全て死亡し、インセクトリウム内の残りの個体も同様に5齢幼虫までに死亡した。この原因が1994年夏の記録的な猛暑によるものか否か明らかではない。しかし、同時期に飼育したアゲハ・クロアゲハ・カラスアゲハの幼虫が正常に発育し蛹化したことから、ほかのアゲハ類と異なり、本種の蛹化までの飼育はかなり難しいと思われる。モンキアゲハの飼育に関しては三枝（1994）による観察記録があり、東京都多摩動物公園の昆虫生態園では、本種の幼虫を約9000個体飼育して、わずかに29個体の蛹しか得られなかったという。

園内では、1988.9.7に食草園のカラスザンショウに産卵しているのを観察しているが、産付卵が順調に発育して、蛹化し羽化したかは不明である（久居, 1989）。

Rapala arata Bremer トラフシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (1994.6.11 教育管理棟付近)

本種も近年しばしば観察されており、今回は教育管理棟裏のヤツデの葉上にいた羽化間もない新鮮な個体が目撃された。これまでの記録のうち、1984年にも新鮮な個体が観察されていることから(久居, 1989)、園内に多いクズ・クララなどで繁殖しているのは確実であろう。

Curetis acuta Moore ウラギンシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (1994.10.7 建物跡地)

本種は秋季の目撃例が多いが、1989年と1990年は夏季にも目撃され、本園での繁殖が示唆されている(久居, 1990, 1991)。

Libythea celtis Fuessly テングチョウ (鱗翅目 テングチョウ科) (1994.4.16 正門前)

本園での目撃例は4月頃に集中する傾向がある。これは、本種が3月下旬～4月に越冬個体が交尾し、多くは4月中・下旬に産卵することから(福田他, 1983)、この時期に観察されることが多いのであろう。また成虫は6～7月にも目撃されており(久居, 1989, 1990, 1991)、園内に生育するエノキで繁殖していると考えられる。

Argynnis paphia Linnaeus ミドリヒョウモン (鱗翅目 タテハチョウ科) (1994.6.4 建物跡地)

本種は初秋の目撃記録が多いが、今回のように夏季に観察されることもあり(久居, 1989)、年によっては園内で繁殖する可能性もある。

Melanitis phedima Cramer クロコノマチョウ (鱗翅目 ジャノメチョウ科) (1994.8.18 正門付近)

正門からインセクタリウムに行く途中の小道で、夏型の雄を捕獲。本種は1987年10月にほぼ同じ場所ですべて初めて捕獲されて以来、この小道を中心にとときどき目撃されており、園内で繁殖している可能性は十分にある。

(2) その他

Gekko japonicus Duméril et Bibron ニホンヤモリ (トカゲ目 ヤモリ科) (1992.4.15 教育管理棟内)

本種は毎年1～2個体、教育管理棟内を中心に目撃される。今回は教育管理棟内の講義室の窓のさんに付いている幼体を目撃。

本園の近くに住む入園者によると、居住するマンションでも見たことがあるとのことなので、本園以外にもまだ本種が広く生息している可能性があると考えられる。

Elaphe conspicillata Boie ジムグリ (トカゲ目 ナミヘビ科) (1994.8.18 教育管理棟前)

本種は、教育管理棟前を除草していたときに目撃された、体長30cm程度の幼蛇である。本園に生息するヘビ類のうちでは目撃例がもっとも少ない。

Cuculus saturatus horsfieldi Moore ツツドリ (ホトトギス目 ホトトギス科) (1994.4.16 正門付近)

本種は上記の日に数回鳴き声が確認された。毎年ではないが渡りの途中、ときどき本園に立ち寄るものと考えられる。守田氏によれば、1993年にはイモリの池の北側にある西トイレ付近で30分程姿を目撃したとのことである。

引用文献

- 福田晴夫ほか8名. 1983. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅱ). 325pp. 保育社, 大阪.
- 久居宣夫. 1989. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(2). 自然教育園報告, (20):1-13.
- . 1990. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(3). 自然教育園報告, (21):11-21.
- . 1991. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(4). 自然教育園報告, (22):1-6.
- . 1994. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(6). 自然教育園報告, (25):29-33.
- 日浦勇. 1977. ナガカメムシ科. 「原色日本昆虫図鑑(下)」, 全改訂新版(伊藤修四郎他編), 111-114. 保育社, 大阪.
- 岩田久二雄. 1982. 日本蜂類生態図鑑. 162pp. 講談社, 東京.
- 川沢哲夫・川村満. 1977. 原色図鑑改訂カメムシ百種. 301pp. 全国農村教育協会, 東京.
- 木元新作. 1984. ハムシ科. 「原色日本甲虫図鑑(Ⅳ)」(林匡夫他編著), 147-223. 保育社, 大阪.
- 国立科学博物館附属自然教育園. 1984. 国立科学博物館附属自然教育園動植物目録. 118pp.
- 大野正男. 1981. 自然教育園のハムシ相. 自然教育園報告, (12):3-19.
- 奥谷禎一. 1977. セイボウ科. 「原色日本昆虫図鑑(下)」, 全改訂新版(伊藤修四郎他編), 327. 保育社, 大阪.
- 三枝博幸. 1994. 難しい飼育—モンキアゲハ. インセクタリアム, 31(9):32-33.
- 鶴田総一郎他. 1952. 国立自然教育園動物目録第1集昆虫綱. 国立自然教育園基礎資料, (1):1-42. (国立自然教育園).
- 安永智秀・高井幹夫・山下泉・川村満・川澤哲夫. 1993. 日本原色カメムシ図鑑(友国雅章監修). 380pp. 全国農村教育協会, 東京.